1　人間発達とは

1　人間の発達　human development とは

人間は，生物としてこの世に存在し，社会的生活者として心理・社会的に個々人の任務を遂行し，生涯を全うしていく生物である．人間は生まれながらにして生物として育っていく力を持っている．身体的に顕著な成長を遂げる幼児期・学童期には，子どもが関わる環境の中で身体的な基礎作りがなされ，身体行動から生じる心理・社会的な実体験を通して青年期の準備をしている．力動的に心理・社会的発達を遂げる青年期には大人になる基礎が構築される．質的変化を成し遂げる成人期や高齢期には，身体的な停滞は必然的ではあるが，精神的には円熟期を迎え人生を創りあげる時期となり，人生の最後まで心身ともに何らかの形で発達していくと考えられる．

2　発達過程と発達期の区分

発達とは，「分化と統合が繰り返されて進展し，相互作用をもって特定の方向に向かう変化である」と考えることができる．年齢が進むにつれて，人間になる諸要素が明確になり，それらが相互に関連しあって統合され，単純な状態から複雑な状態へと経過していく過程である．

発達期に関しては，教育的な立場，社会的な立場，法的な立場などから，色々な区切り方がなされているが，コメディカルの立場か

表 1　人間発達期の区分

区分		年齢
胎児期（未熟児）		9 週～出生（40 週） 37 週以前
新生児期		出生後 4 週
乳児期		0 ～ 1 歳
幼児期	前期	1 ～ 3 歳
	後期	3 ～ 6 歳
学童期		6 ～ 12 歳
青年期	前期	12 ～ 18 歳
	後期	18 ～ 22 歳
成人期	前期	22 ～ 35 歳
	中期	35 ～ 50 歳
	後期	50 ～ 60 歳
高齢期	前期	65 ～ 74 歳
	後期	75 歳～

JCOPY 498-07676

<table>
<tr><td>時期</td><td>快楽</td><td>自己主張</td><td>自己統制</td><td>達成・有能感</td><td>自己認識</td><td>社会的満足</td></tr>
<tr><td>年齢</td><td>0～1歳</td><td>1～3歳</td><td>3～7歳</td><td>7～15歳</td><td>15～22歳</td><td>22歳～</td></tr>
<tr><td rowspan="6">課題</td><td colspan="6">自己中心的な哺乳，摂食，基礎的身体活動，喃語，感覚遊び，甘え（親子の絆）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="5">言語的要求，対人交流，目的遊び，物事に対する関心の喚起</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td colspan="4">多語文，疑問文の応答，ルール遊び，応用的身体活動への関心の喚起</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td colspan="3">集団活動，課題の達成，自己実現，社会的促進</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2">自己実現，他者との出会い，価値観，自己概念</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>職業人としての継続，仕事観，家族の形成・世話</td></tr>
</table>

図1　発達段階の区分（子どもの能動的行動の視点から）

ら，生物学的な側面と心理・社会的な側面から表1のような区分として考えたい．また，子どもの能動的行動の視点から，図1を参考にすると臨床的に役に立つ．

3　発達に関する用語

人間が単純な状態から複雑な状態になっていく過程の用語は，「成長」「発達」「成熟」「成育」「発育」などと種々の言葉で表現されている．これらの言葉を定義したものを表2に示す．要約すると，「成長とは体が育つこと」，「発達とは心を中心として構造や機能が育つこと」といえる．

運動行動が変化していく過程を運動発達，精神的（心的・知的）に行動が

表2　「発達」に関連する用語の定義

成長　growth
生物学的に増大していく成熟への過程で，形態の量的な変化を指し，測定することができる．身長や体重はその代表である．

発達　development
生物学的構造や機能が，分化，多様化，複雑化していく過程に，学習（経験，練習，訓練，教育）が加わった現象といえる．

成熟　maturation
生物学的に充分に安定した構造・機能になっていくこと．充分に成長，発達することである．性成熟，骨成熟，脳成熟などはその代表である．

発育　growth and development
「成長，発達」を統合したことばである．

表 3　発育の 4 原則

1. 順序性と方向性
   - 乳児期の運動発達は，中枢神経系の成熟と関連していて，一定の順序性と方向性を示している．
   - 順序性：進化の過程で獲得してきた遺伝的なもので，遺伝子によってコントロールされているが，ある程度の個人差はある．
     (例)　在胎内での発育に少々の個人差はあるが，おおよそ同じ期間に同じような発育をしている．
     機能の発達は，おおよそ以下の順序で発育する（中枢神経と末梢神経の髄鞘化と深く関わっている）．
     定頸⇒寝返り⇒座位⇒這う⇒つかまり立ち⇒独歩
     注視⇒手で遊ぶ⇒玩具で遊ぶ⇒人と遊ぶ
   - 方向性：①頭部から尾部へ：例えば，見る⇒上肢を届かせる⇒足も使う
     ②身体の中枢部から末梢部へ：上腕の運動は指先よりも早く発達する．
     ③粗大運動から微細運動へ：乳児の粗大な全身運動⇒目的的な正確な運動に
     ④発育が進むほど，個人的な違いが大きくなる：個人的要因と環境的要因が関係
2. 速度の多様性
   - 時期，臓器，性別，機能の成熟などにより異なる（図 2）．
     (例)　身長は，時期的には，乳児期，学童期後期，青年期前期に急速に伸びる．性差では，学童期後期頃は女児が，青年期前期頃は男児が伸びる．
     脳は，出生後急に大きくなって，5 歳くらいで成人の 80％位の重量になる．
     生殖器は，青年期前期頃より急速に発育し，成人の大きさに達する．
3. 敏感期の存在
   - 身体的器官や精神機能の現象には，決定的に重要な時期がある．
     (例)　母親の妊娠初期（妊娠 3 カ月目が終わる前）に風疹に感染すると，新生児が白内障や心臓奇形をもって生まれてくる．
     乳児は，生後 7 カ月（～ 10 カ月）くらいまでに母親との愛着関係を作りあげるといわれている．
     2 歳半までの間目隠しをして物を見せないと，永久に物が見えるようにはならないと言われている．
4. 相互作用の影響
   - 細胞や臓器，生活の場における刺激や情報の作用が影響しあっている．
     (例) 生存のプログラムを作動させることに関わっている．
     出生直後の母子相互作用に関わっている．

JCOPY 498-07676

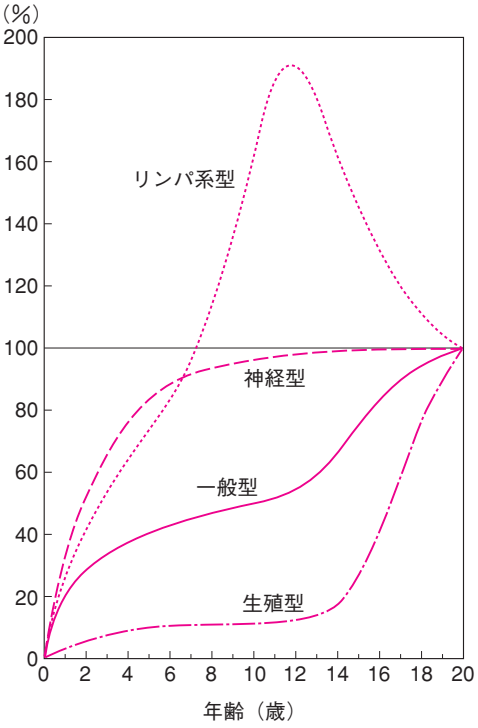

図 2　スキャモンの臓器別発育曲線
（小林寛道，他．幼児の発達運動学．京都：ミネルヴァ書房；1990 より許諾を得て転載）
20 歳のときの身体各部・器官の重量を 100 として，20 歳に至るまでの各発達時期のその重量の割合を発達曲線で示してある．
身長・体重や内臓系の発育は，乳幼児期の第一次性徴期後，学童期においてプラトーに達しており，特に学童期前期における成長速度はゆっくりとしている．脳や重量，頭径等の発達を示す神経系も，出生から急激に発達し，5 歳までには成人の 80％の成長を遂げ，12 歳ではほぼ 100％に達する．また，免疫力を高めるリンパ組織の発達は，生後 12，13 歳にてピークを迎え 100％を超えるが，徐々に大人のレベルに戻っていく．

変化していく過程を精神発達という．

4　発育の 4 原則

人間は個人的なものばかりでなく進化論的立場からも，年齢，性別，民族，発達パターン，生体機能などにおいて異なった形，大きさ，現象などを示し，個々人による差が生じていて，多様性 heterogeneity を示している．それらは，遺伝子によってコントロールされた秩序と順序に従って発育 growth and development している．その原則を表 3 に示す．

発達は，成長に関しては，生涯上昇カーブをたどるわけではないが，精神的な質的変化は，程度の差はあるが上昇カーブを継続し，年代相応に発達していく．

＜福田恵美子＞

2　発達概念の歴史的変遷

人間の発達を考えるとき，子どもの時期の発育を抜きにしては考えられない．個々人の所属する社会・民族・国・文化的背景をも考慮に入れなければならないと考える．

人間は，生涯にわたり発達を続けていくが，小児期の発育にはめまぐるしいものがある．発達の概念が現在のように明らかになってきたのは，ヨーロッパにおける人権や思想の流れと関わりがあったようである．それは子どもの存在が人権として認められるようになったり，医学の発展による社会の変化などが大いに関係していたようである．1850 年代のイギリスにおいては，孤児院を子ども専門の病院に変え，子ども観を見つめなおすきっかけになっている．

わが国においては，明治政府のもとでの教育制度に見られるように，子どもに対する教育的配慮がなされ，医療福祉面においては，児童虐待防止法（1933 年），母子保護法（1937 年），児童憲章，児童福祉法（1946 年）が施行された．子どもの専門病院ができたのは 1965 年である．

このような流れの中で，子どもたちの体格が向上し，死亡率は低下し，子どもの発達，子どもの人権は安泰のように見える．しかし，家庭環境や社会環境における問題が子ども達の発育を脅かしている現在，乳幼児時期の発育のあり方を，社会的問題の対応として考え直さなければならない時期になっている．不登校，いじめ，親による虐待，心身症，うつ状態などが，自然で当たり前な子どもの発達の阻害要因となっていることから，発達を社会的に対応することとして考え直すことは，否定できない現況にあると判断できる．

発達が顕著な時期の子どもに焦点を当て，子ども観の視点から，発達概念の歴史的変遷を探ったものを以下で述べる．

JCOPY 498-07676